にほんご多読(たどく)ブックス

信長(のぶなが)・秀吉(ひでよし)・家康(いえやす)

戦国時代(せんごくじだい)を生(い)きた三武将(さんぶしょう)

中崎温子［作］

NPO多言語多読［監修］

Taishukan Japanese Readers

Level 4



TAISHUKAN

〈にほんご多読ブックス〉の読み方

辞書を使わないで、すらすら読めるレベルの本を楽しくたくさん読むこと、これが「多読」です。多読は日本語の勉強にとても大切です。「にほんご多読ブックス」には、昔話や小説、伝記、ノンフィクションなどいろいろな話が入っています。次のルールを守って楽しみながらどんどん読みましょう。

●多読のための４つのルール

1 やさしいレベルから読む

2 辞書を引かないで読む

3 わからないところは、とばして読む

4 進まなくなったら、他の本を読む

にほんご多読ブックス
Taishukan Japanese Readers

Level
4

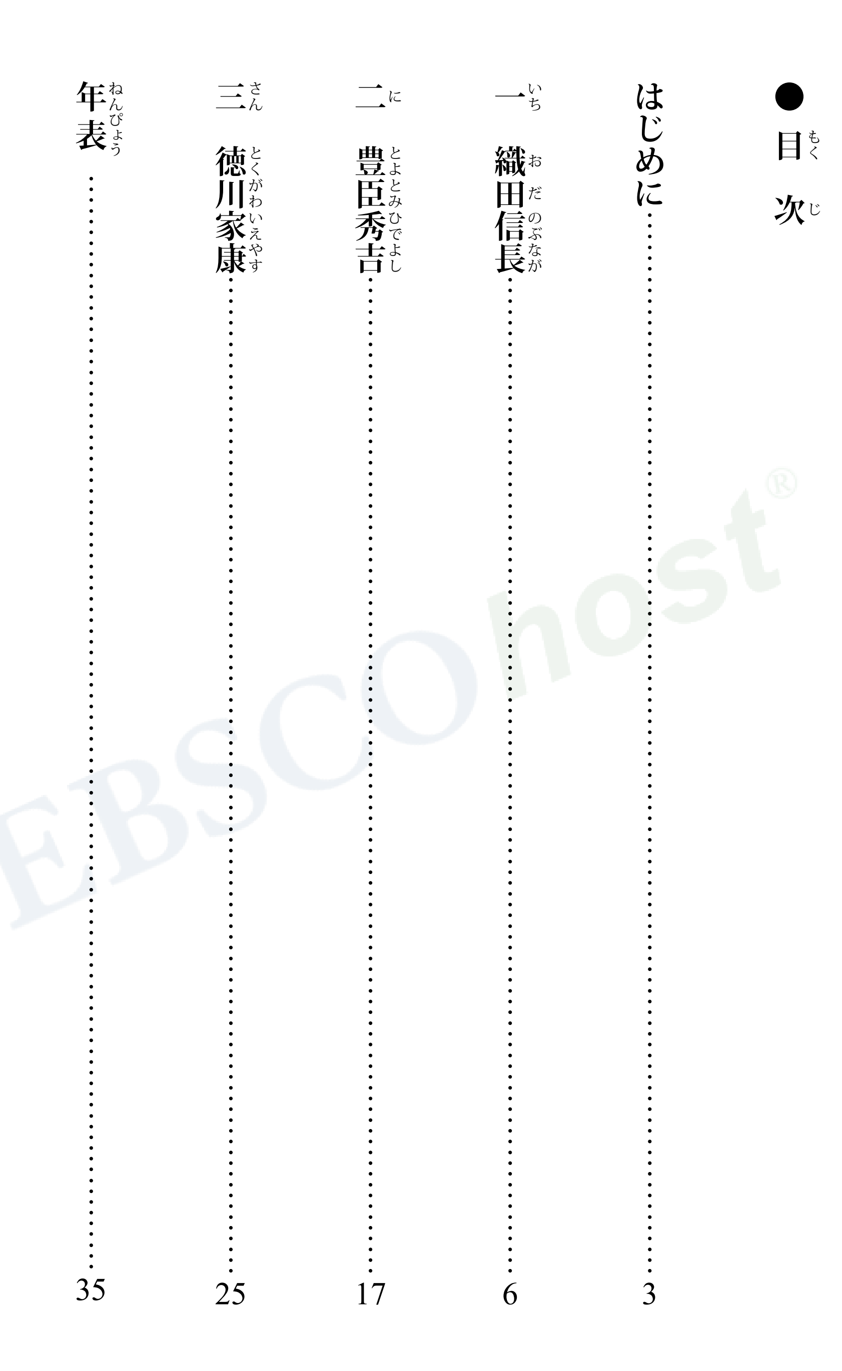
信長・秀吉・家康

戦国時代を生きた三武将

中﨑温子［作］
NPO多言語多読［監修］
浅野秀匡［挿絵］

大修館書店

●目次



はじめに

みなさんは、武士を知っていますね。武士は侍ともいいます。力のある武士を武将といいます。あなたの知っている武将は誰ですか。織田信長ですか。豊臣秀吉ですか。徳川家康ですか。

この三人は、十六世紀に日本の支配者になった強い武将です。後の時代の人たちが、この三人の性格を川柳（五字、七字、五字の短い詩）で表しています。



ホトトギス



信長（のぶなが）



秀吉（ひでよし）

家康（いえやす）

「鳴（な）かぬなら　殺（ころ）してしまえ　ホトトギス」

「鳴（な）かぬなら　鳴（な）かせてみせよう　ホトトギス」

「鳴（な）かぬなら　鳴（な）くまで待（ま）とう　ホトトギス」

ホトトギスは、夏（なつ）が来（き）たことを知（し）らせる鳥（とり）です。日本人（にほんじん）は、昔（むかし）から、このホトトギス

が鳴くのを楽しみにしていました。それなのに、そのホトトギスが鳴かなかったら、
「信長なら、気が短いから殺してしまっただろう」
「秀吉なら、鳴くように一生懸命努力をしただろう」
「家康なら、じっと鳴くのを待っただろう」
と、昔の人は考えたのです。
この三つの川柳は、三人の武将が時代をどう生きたのかをよく表しています。
では、織田信長から順番に見ていきましょう。

一　織田信長

〈子どもの頃〉

信長は、一五三四年、今の愛知県名古屋市にある名古屋城（その頃は那古野城）で生まれました。その二百年ぐらい前に、武将の足利家中心の政府（室町幕府）が京都にできましたが、信長が生まれた頃には、室町幕府の力は弱くなっていました。強い武将たちが、将軍になりたいと思って、いろいろなところで戦っていました。信長の父、信秀もそんな武将の一人でした。





信長は、小さい時から大変気が強くて、大人の古い考えが嫌いでした。武将の子どもなのに、いつも袖のない短い着物を着ていました。そして、馬に乗って町へ行って遊びまわっていました。

〈桶狭間の戦い〉

子どもの頃は、大人の言うことを聞かないうつけ者（ばか者）と言われた信長でしたが、父、信秀が死ぬと、他の武将と戦って、どんどん自分の国を大きくしていきました。そして、清洲城に移りました。

その頃、信長の近くで一番力を持っていたのは、今川義元です。義元は、京都へ行っ

て足利家の代わりに日本の政治をしようと考えました。京都へ行くには、隣の信長を倒さなければなりません。義元と信長の間に戦いが起こりました。義元の軍は二万五千人。信長の軍は三千人。誰もが信長が負けると思いました。しかし、急な大雨が信長を助けました。

義元の軍が休んで酒を飲んでいるのを信長が後ろの山から見ていると、急に強い風が吹き、大雨が降ってきました。信長は雨の中、義元の軍に近づいて、突然大声で言いました。

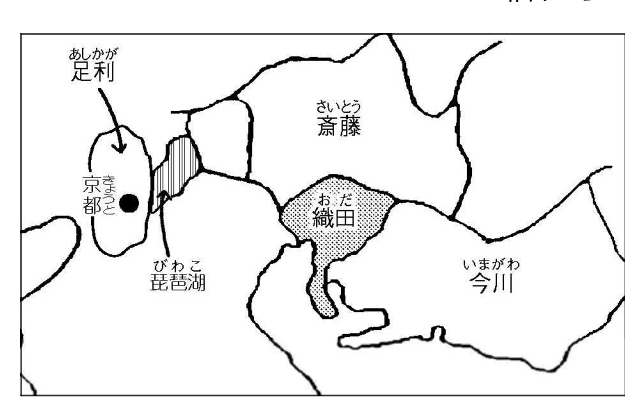
「今だ！　さあ、行くぞ！」

「はい、信長様」

「おー！」

「おー！」

休んでいた義元の軍は、戦う準備ができていませんでした。信長の軍は、少ない人数で義元の大軍に勝ったのです。





25000人の義元軍に3000人の信長軍が勝った「桶狭間の戦い」

これを「桶狭間の戦い」といいます。信長、二十七歳の時のことです。

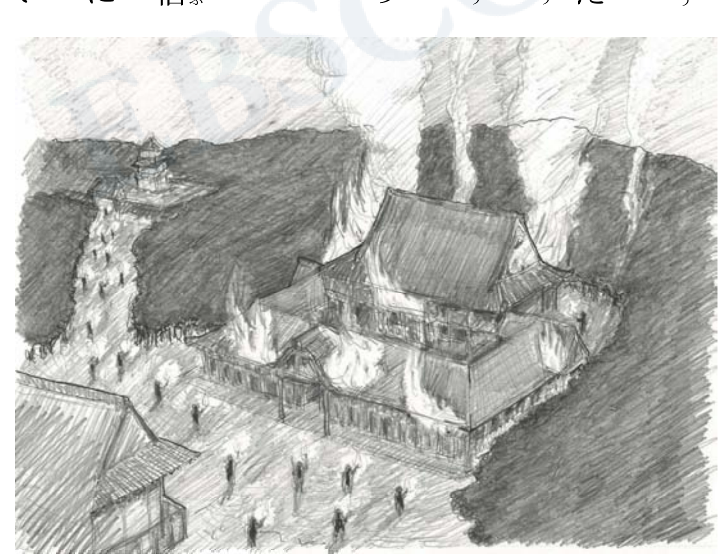
次に、信長は、斎藤家の領地も自分のものにしたいと思いました。この領地は、妻の父、斎藤道三のものでしたが、道三は自分の息子と戦って死にました。その頃は、親と子どもが戦うことは珍しくなかったのです。信長は、その道三の息子と七年間戦って、やっと勝ちました。そして、岐阜城を造って、清洲城から移りました。これで、京都との間には、信長より強い武将はいなくなりました。信長の、日本一の武将になりたいという夢は、ますます大き

くなっていきました。

〈延暦寺焼き討ち〉

京都では、足利義栄が室町幕府の十四代将軍になっていました。信長は、将軍になりたいと思っていた足利義昭を助けてとうとう京都に入りました。義昭は一五六八年、十五代将軍になりましたが、信長の力は将軍の力よりも大きくなっていったのです。

すぐに義昭と信長の関係は悪くなりました。義昭は、信長に反対する武将たちと一緒に信長と戦いましたが、負けて比叡山の延暦寺に逃げました。その頃、延暦寺の僧たちは強い



信長は反対勢力の延暦寺を焼き討ちにした。

力を持っていて、信長に反対していたので、信長は、延暦寺のたくさんの建物に火をつけました。寺にいた僧や女子どもまで約三千人が殺されたと言われています。

日本には、人々の生活の中に古くから仏教があります。人々は寺を焼いた信長を恐ろしいと思いました。強くて恐ろしい信長と誰も戦いたくありませんでした。

足利義昭は京都から去り、室町時代が終わりました。信長、三十八歳でした。

〈長篠の戦い〉

その頃、東の方にも、強い武将、武田信玄がいました。信玄は病気で死んでしまいますが、信玄の死の二年後、信長は、信玄の息子と戦って勝ちます。有名な「長篠の戦い」です。

この戦いは、馬に乗って槍で戦う武田の軍と、鉄砲で戦う織田の軍との戦いでした。

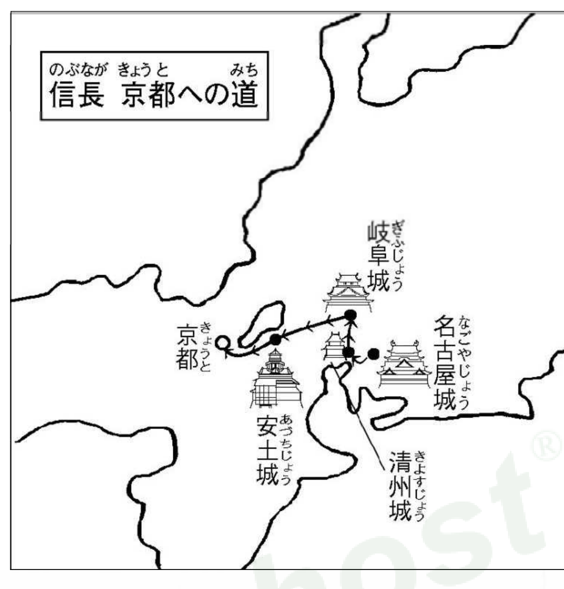
この戦いで、信長は三千丁の鉄砲を使いました。鉄砲は、撃つまでに時間がかかるので、それまで、あまり使われませんでした。しかし、信長は、前の人が撃ったらすぐその

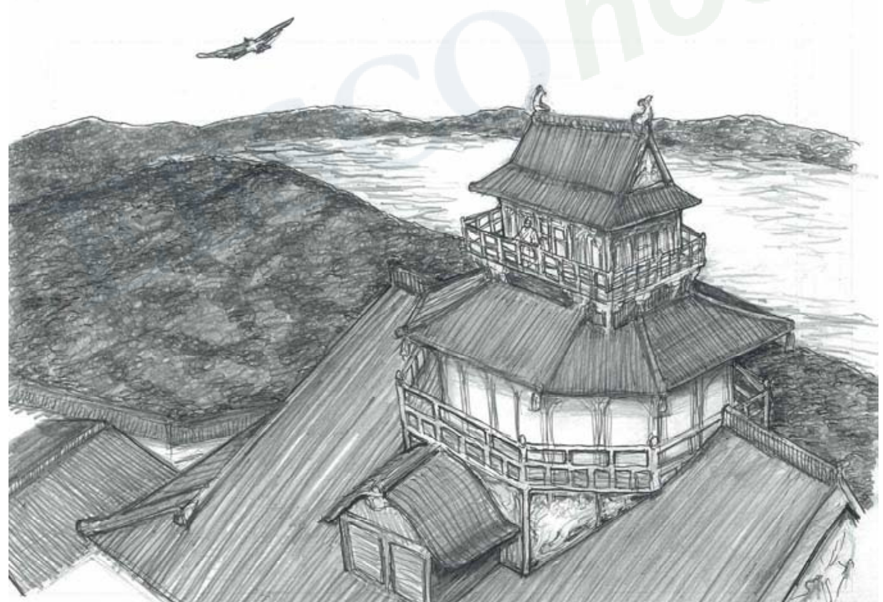


信長軍の鉄砲が、武田の最強の騎馬隊に勝った。

次の人が撃つ、撃った人はまた一番後ろで撃つ準備をするというやり方で、鉄砲を上手に使いました。信長の新しい戦い方が、古い戦い方に勝ったのです。

その後、信長は、滋賀の琵琶湖のそばに、立派な安土城を造り、少しずつ京都に近づいていきます。日本を自分のものにするという信長の夢が本当になるまで、あと少しでした。



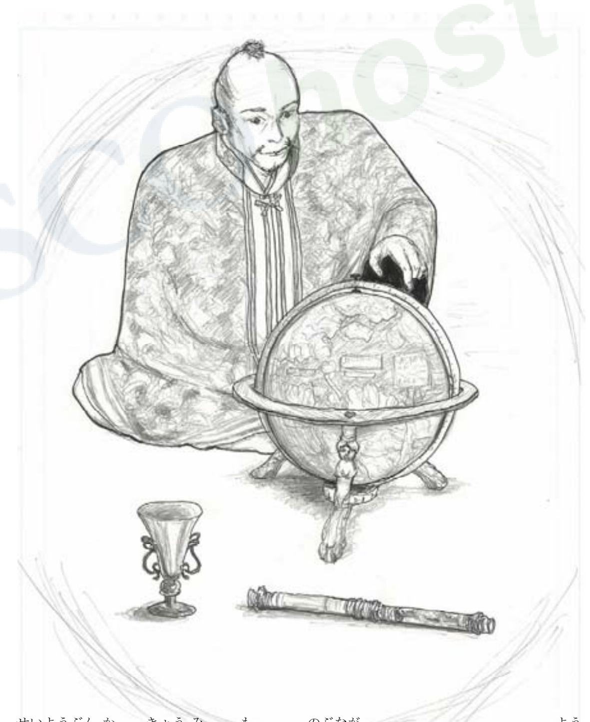


琵琶湖を見下ろす安土城。6階建てで一番上に天守閣がある。天守閣がある初めての城。

〈その頃の文化と信長の政治〉

一五四九年、日本にスペインやポルトガルから、キリスト教が入ってきました。新しいものが好きな信長は、キリスト教の活動を認めました。そして、キリスト教を教えに来たスペイン人やポルトガル人が持ってきたヨーロッパの珍しいものを見て、強い興味を持ちました。

信長は、また、商人が自由に物を売ることができるようにしました。それを「楽市楽座」といいます。それまでは、貴族や神社や寺にお金を払って商売をする権利をもらった商人のグループ（座）に入っていないと、商売ができなかったのです。



西洋文化に興味を持った信長は、マントなどの洋服をよく着たという。

〈本能寺の変〉

残った信長の敵は、西で一番強い武将、毛利輝元です。

信長は、毛利を倒すために家来の豊臣秀吉を送りました。一五八二年五月、信長は、明智光秀にも、秀吉を助けに行けと命令しました。六月には信長も京都の本能寺まで来ていました。しかし、光秀は、秀吉のところへ行く途中、「敵は本能寺にあり」と言って、本能寺へ戻ります。この言葉は、「戦う本当の相手は、毛利ではなくて信長だ」という意味です。光秀は、信長の家来だったのに、どうして信長と戦おうと思ったのでしょうか。その理由は、信長が自分より秀吉を大切にしたからとか、信長の新しいやり方が嫌だったとか、いろいろ言われていますが、よくわかっていません。

それは、朝になる少し前のことでした。信長は、馬や人の声、鉄砲の音が聞こえたので、起きて家来に言いました。

「外を見てこい！」

家来は、すぐ戻ってきました。



光秀の兵に囲まれて、信長は自分で寺に火をつけた。

「信長様、明智光秀様の軍が、寺の周りに…」

「えっ、なに？　光秀が？」

信長は信じられませんでした。

光秀の軍は一万三千人。信長は、この時は、多くの家来を連れていませんでした。もう終わりだと感じた信長は、「人生五十年…夢のような一生だったなあ」という歌を歌って、寺に火をつけたと言われています。信長は四十九歳でした。これを「本能寺の変」といいます。

信長が死んで十日後、秀吉の軍が光秀の軍と戦って、光秀の軍は負けます。光秀は逃げる途中、農民に殺されてしまいます。そして、この後、豊臣秀吉が力を持つようになります。

二　豊臣秀吉

〈武将になるまで〉

信長の次に日本を支配したのは、その家来だった豊臣秀吉です。

秀吉は、一五三七年に、今の愛知県名古屋市で生まれました。家は貧乏な農家で、十五歳の時に父が死ぬと、家を出ていろいろな仕事をしました。十八歳の時、織田信長のところで働くことになりました。秀吉は、信長のために大変よく働きました。信長も、よく働く頭のいい秀吉を「猿、猿」と呼んで大事にしました。猿と呼んだのは、秀吉の顔が猿に似ていたからです。

信長の家来になってすぐの頃、秀吉は、信長が出かける時、草履を出す仕事をしていました。

ある寒い日、信長は草履をはいた時、びっくりしました。

「お、温かいぞ。猿、草履の上に座っていたな」

「いいえ、信長様の足が冷たくないように、着物の胸に入れて温めておきました」

これは、秀吉らしさを表す有名な話です。また、こんな話もあります。

大雨で、信長の城・清洲城が壊れました。信長が、直せと命令したのに、一か月経ってもなかなか直りません。信長は、大変怒りました。それを見て秀吉は、

「信長様、私なら三日で直せます」

と言いました。

「猿、大きなことを言って、できなかったらお前の首がなくなるぞ」

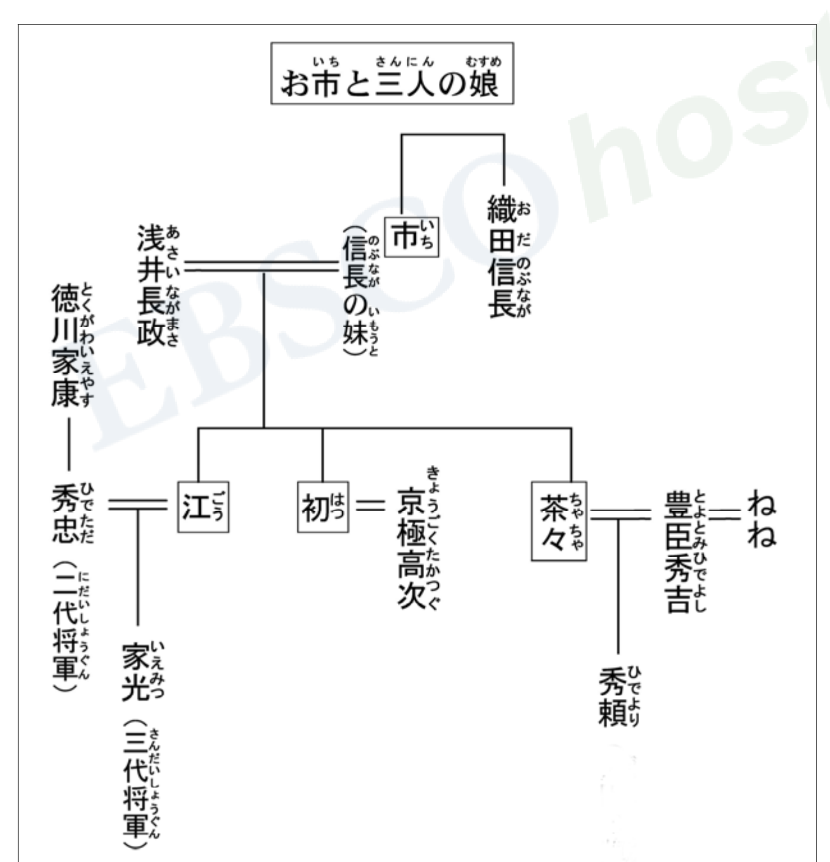
「わかっております」

「よし、そんなに言うなら、やってみろ」

秀吉は、信長のはく草履を温めてから差し出した。

秀吉は、働く人たちをいくつかのグループに分けました。そして、早くできたグループにお金や米をたくさん与えると言って、競争させました。約束通り、三日で城は直りました。信長は秀吉を大変ほめました。

一五六一年、秀吉は、信長の家来の娘・ねねと結婚しました。その時、織田信長は、斉藤の軍と戦っていたのですが、秀吉は、斉藤家の力のある家来を信長の味方にするなどの大きな働き



をしました。信長は、斉藤軍を倒して、その領地を自分のものにしました。
信長は次々と敵を倒して、京都に近づき、朝倉・浅井の軍にも勝ちました。秀吉はここでも、大きな働きをします。浅井長政の妻になっていた信長の妹・市とその娘たちを守って信長のところに連れて帰ったのです。三人の娘の一人、茶々は、その後、秀吉の側室（本妻以外の妻）になります。信長は、秀吉に浅井家の城・小谷城を与えました。
こうして、農民の息子だった男が、とうとう城を持つ武将にまでなったのです。

〈信長の死後〉

「本能寺の変」で信長が明智光秀に殺された時、秀吉は、毛利軍と戦っていました。急いで京都に戻った秀吉は、信長のどの家来よりも早く光秀の軍を倒しました。秀吉は思いました。
――これからは、私の時代だ――
その後、戦いの上手な秀吉は、自分に反対した武将たちに次々に勝って、思い通り、



信長の安土城を超える豪華な大坂城。1615年、家康との戦いで焼けてしまった。その後、徳川が再建した。

日本を支配するようになっていきます。信長の死から一年半後には、大坂城本丸（天守閣のある、城の中心の建物）を完成させました。金をたくさん使った立派な城でした。

一五八五年、秀吉は、天皇を助ける「関白」になります。次の年には、「太政大臣」というもっと高い位につきます。

〈秀吉の政治〉

この頃、秀吉は、日本中の田や畑の広さを測り、そこで作る米の量を決めました。農民は決めた量の三分の二を税として出さなければならなくなりました。

また、秀吉はキリスト教を禁止しました。キリスト教の力が自分より大きくなることを心配したのでしょう。

さらに、農民が刀を持つことを禁止する法律を作って、武士と農民をはっきり分けました。

こうして、国の統一を進めた秀吉は、自分の力を見せるために、金や銀を使った建物を造らせたり、有名な画家に絵を描かせたりしました。大坂城には金の茶室がありました。京都の南に立派な大きな建物を造って、天皇を招待して茶会を開いたりもしました。

一五九〇年に、秀吉は、徳川家康と一緒に戦って、東の北条家を倒しました。こ

れで、秀吉は東北から九州までの日本を支配する武将になったのです。

ところが、秀吉の夢は、ここで終わりませんでした。

〈朝鮮戦争と秀吉の死〉

秀吉は、隣の朝鮮や明（中国）やインドなどアジアの国々も支配したいと考えました。そして、日本中から武将の軍を九州に集めて、朝鮮へ軍を送りました。初めは、日本軍が勝っていましたが、明軍が朝鮮軍に味方したので、日本軍は負けて日本に戻りました。

五年後、秀吉は、また大軍を朝鮮に送りました。しかし、今度は初めから負け続け、日本軍は帰国しました。

秀吉は頭のいい武将でしたが、力を持ってからは、家来たちにも理解できないことをするようになりまし



た。朝鮮に軍を送ったことも大失敗でした。

この二回の戦争の間に、茶々が秀吉の初めての子・秀頼を産みました。なかなか子どもが生まれなかった秀吉は大変喜びました。しかし、一五九八年、秀吉は病気で死んでしまいます。六十二歳でした。

秀吉の死後は、徳川家康が大きな力を持ちます。大坂城にいた秀頼と茶々は、一六一五年、家康と戦って負けました。これで、豊臣家は完全に終わることになります。

三　徳川家康

徳川家康は、江戸（今の東京）に幕府を開いた武将です。この江戸幕府は二百六十年も続きました。家康は七十五歳まで生きましたが、将軍になったのは六十二歳の時です。それまで長い間、織田信長や豊臣秀吉の下で日本を支配する機会を待っていたのです。

〈人質だった子ども時代〉

家康は、一五四二年に、岡崎城で生まれました。その時、信長は九歳、秀吉は六歳でした。

家康の生まれた家は、織田家と今川家の間にあって、力が強くありませんでした。家康の父・広忠は、自分の家を守るために、家康を人質として今川家に渡しました。

織田家に連れていかれたこともありましたが、その暮らしは十三年も続きました。

十七歳の時、家康は、今川家の武将の一人として、初めて戦いに出ました。その時の敵は信長でした。そして、その二年後、「桶狭間の戦い」で、今川義元が信長に負けます。今川義元がいなくなったので、家康は、自分の城に帰ることができました。

すぐ隣には、強い信長がいましたが、信長は、家康と戦わないことを約束してくれました。信長は、東隣の家康を味方にして、西の敵と戦いたいと考えたのです。西には、政治の中心の京都があります。

一五六七年、家康の息子・信康と信長の娘が結婚して、徳川家と織田家の関係はますます強くなりました。

〈信長の下で〉

この時代、日本で一番強いと言われていたのは、甲斐（今の山梨県）の武田信玄です。一五七二年、武田信玄は京都に向かいます。それを知った家康は、武田軍と戦おうとしました。しかし、武田軍は二万人、徳川軍は八千人しかいません。家康は、信長に助けを求めました。しかし、信長は、浅井・朝倉と戦っていたので、三千人しか貸してくれませんでした。徳川軍は武田軍に負けて、家康は城に逃げて帰りました。

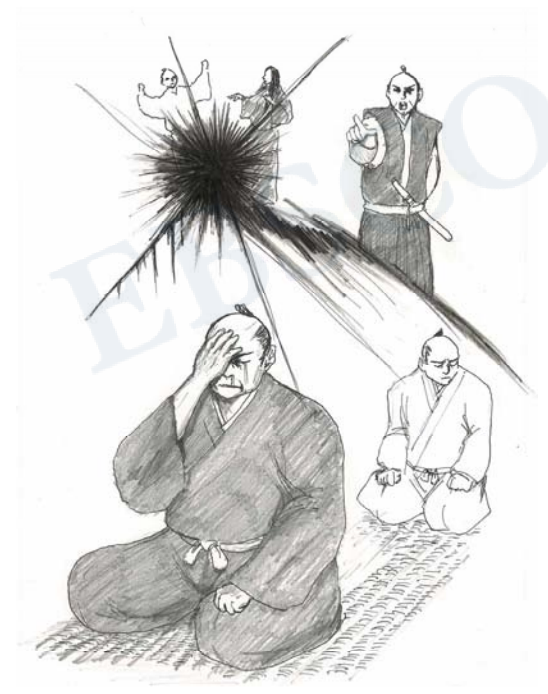
ところが、不思議なことに、武田軍は京都へ行くのを突然止めて、国に帰りました。後でわかったことですが、この時、信玄は病気になって、国に帰る途中で死んでしまったのです。

家康は、この二年後、信長と一緒に信玄の息子、勝頼と戦います。「長篠の戦い」です。この戦いは、信長にとっても大事な戦いでした。武田軍は、馬に乗って戦う強い軍でしたが、朝早く始まった戦いは、二時頃には終わりました。織田・徳川軍の勝ちでした。

それから四年後、家康を困らせる事件が起こりました。家康の妻と息子・信康が、敵の武田家と連絡を取り合っているという話が信長の耳に入ったのです。信長は激しく怒って、家康に、妻と信康を殺すように命令しました。家康は大変苦しみました。しかし、強い信長に反対したら、徳川家が危なくなります。仕方なく、信長の言う通り、妻と大事な息子を殺さなければなりませんでした。

一五八二年、家康は信長から三河（愛知県東部）、遠江（静岡県西部）、駿河（静岡県中部）を与えられます。

その年の六月、「本能寺の変」が起こります。毛利家と戦っていた秀吉は、信長を殺した明智光秀を倒します。



家康は、信長の命令で妻と息子を殺さなければならなかった。

その時、家康は、京都の近くにいましたが、一緒にいた家来は十人だけでした。明智光秀と戦うには少なすぎます。家康自身も殺されるかもしれません。家康たちは、海に出て船で逃げ帰りました。

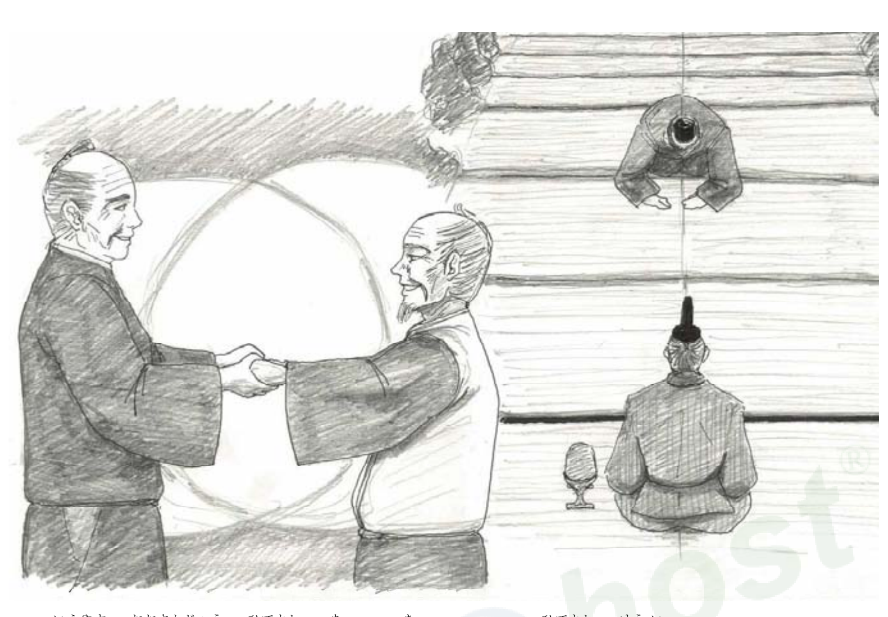
〈秀吉との関係〉

明智光秀を先に殺したことで、信長の次の支配者は秀吉になりました。日本中の武将が秀吉の大坂城に挨拶に行きました。

しかし、信長にも大事にされて大きな力を持っていた家康は、大坂城に挨拶に行きませんでした。

秀吉も、家康の力を知っていたので、家康を敵にしたくありませんでした。四十四歳の妹を四十五歳の家康と結婚させたり、母を家康の城に住まわせたりしました。

一五八六年、とうとう家康は、大坂城に行くことにしました。秀吉は、とても喜



家康が大坂城の秀吉に会いに来たことで、秀吉の優位がはっきりした。

びました。

「家康様、よく来てくださいました。ありがとうございます」

「秀吉様、ご招待ありがとうございます。信長様の後をよろしくお願いします」

家康が大坂城の秀吉のところに来たことで、秀吉が日本一の武将であることが、みんなにはっきりわかりました。ここでもまた家康は、自分が支配者になることをしばらく待つことにしたのです。

秀吉が北条を倒し、日本の支配者となると、家康は江戸を与えられました。江戸は、京都から遠い田舎でしたが、家康

は、江戸に新しい町を作って、秀吉が死ぬまで秀吉の政治を助けました。

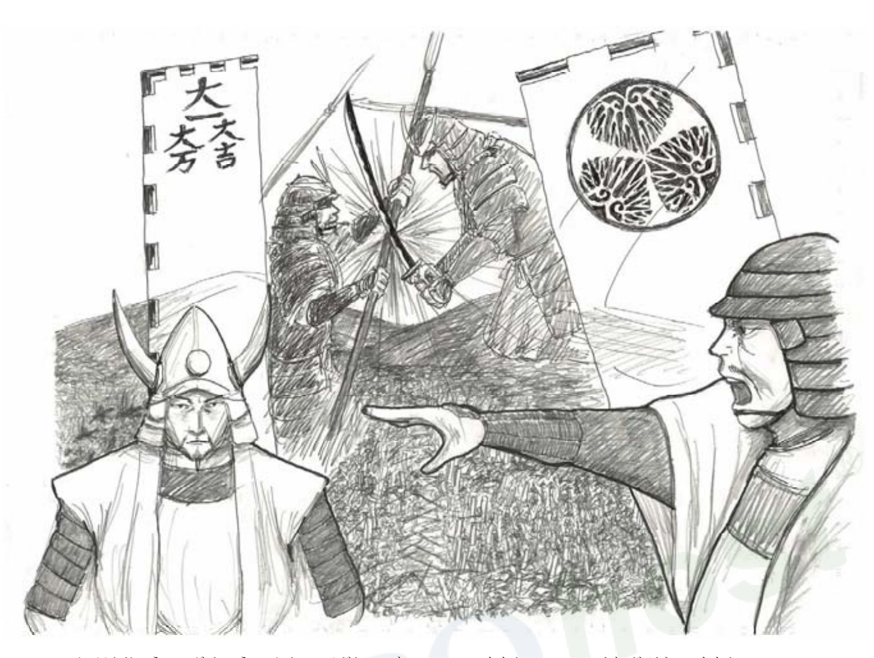
秀吉がもうすぐ死ぬという時、家康をはじめ、十人の武将が秀吉の様子を見守りました。秀吉は、家康たちに、六歳の息子・秀頼を守ってくれるよう、何度も何度も頼んで、死んでいきました。


家康など10人の武将が見守る中で、秀吉は亡くなった。

〈将軍になる〉

とうとう家康が力を見せる時が来ました。家康は、秀吉の部下だった武将たち何人かを味方にして、日本支配への一歩を踏み出そうとします。そして、すぐに、豊臣家を守ろうとしていた石田三成との関係が悪くなります。

一六〇〇年、三成と家康の間に戦いが起こりました。日本中のほとんどの武将が西



日本中の武将が西と東に分かれて戦った「関ヶ原の戦い」

の三成か東の家康に味方して、大きな戦いになりました。「関ヶ原の戦い」です。激しい戦いでしたが、家康の東軍が勝ちました。

家康は、一六〇三年、天皇から将軍の位を与えられて、江戸幕府を開きました。

家康は、徳川家が日本を支配し続けるために、いろいろな法律を作りました。また、キリスト教や外国との貿易を禁止しましたが、長崎で外国と貿易することだけは許しました。日本中の金山や銀山も徳川家のものにして、新

しいお金を造りました。こうして、家康の手で、日本は新しい時代の始まりを迎えることになったのです。
しかし、豊臣家は、まだ倒れたわけではありません。家康は、孫娘を秀頼と結婚させるなどして、豊臣家が徳川家の敵にならないようにしました。
ところが、家康の息子・秀忠が二代将軍になると、大坂城にいた秀頼の母・茶々は大変怒りました。家康の次の将軍は秀頼だと思っていたからです。さらに、家康から、秀頼と一緒に大坂城を出るように言われて、とうとう戦いになりました。
一六一五年、大坂城は燃えてなくなり、秀頼と茶々も死んでしまいました。
次の年、家康は、江戸から移り住んでいた静岡の城で、病気で死にました。七十五歳でした。日光東照宮（栃木県日光市にある世界遺産）に眠っています。

1616年	家康、死ぬ
：	徳川の時代が続く
1867年	江戸幕府が倒れ、武士の時代が終わる
1868年	明治時代が始まる

- 1868年〜1912年　明治
- 1912年〜1926年　大正
- 1926年〜1989年　昭和
- 1989年〜　平成

【参考図書】

○織田信長

『堂々日本人物史４　織田信長』（筑波常治、国土社）

『学研まんが人物日本史　織田信長』（樋口清之監修、学習研究社）

『週刊真説歴史の道１　織田信長』（岡本八重子編、小学館）

○豊臣秀吉

『徹底大研究日本の歴史人物シリーズ⑪　豊臣秀吉』（谷口克広監修、ポプラ社）

『学習漫画日本の伝記　豊臣秀吉』（永原慶二監修、集英社）

『小学館版学習まんが人物館　豊臣秀吉』（小和田哲男監修、小学館）

『豊臣秀吉』（吉本直志郎、ポプラ社）

○徳川家康

『徹底大研究日本の歴史人物シリーズ⑫　徳川家康』（谷口克広監修、ポプラ社）

『堂々日本人物史８　徳川家康』（筑波常治、国土社）

『学研まんが人物日本史　徳川家康』（樋口清之監修、学習研究社）

年表

1338年	足利尊氏、京都の室町に幕府を開く
1467～1477年	応仁の乱（将軍の力が弱くなり、力を持った武将たちが争った大きな戦い）
1534年	織田信長、生まれる
1536年	豊臣秀吉、生まれる
1542年	徳川家康、生まれる
1543年	鉄砲が日本に入ってくる
1549年	キリスト教が日本に入ってくる
1560年	信長、「桶狭間の戦い」で今川義元に勝つ
1571年	信長、比叡山延暦寺を焼く
1573年	信長、室町幕府を倒す
1575年	信長、「長篠の戦い」で武田勝頼に勝つ
1576年	信長、安土城を造る
1582年	信長、「本能寺の変」で死ぬ
1585年	秀吉、関白になる
1590年	秀吉、日本の支配者になる
1592年	秀吉、朝鮮と戦う（1回目）
1597年	秀吉、朝鮮と戦う（2回目）
1598年	秀吉、死ぬ
1600年	「関ヶ原の戦い」
1603年	家康、江戸（今の東京）に幕府を開く

［監修者紹介］

NPO 多言語多読（エヌピーオー　たげんごたどく）

2002年に日本語教師有志が「日本語多読研究会」を設立し、日本語学習者のための多読用読みものの作成を開始した。2012年「NPO 多言語多読」と名称を変更し、日本語だけでなく、英語、韓国語など、外国語を身につけたい人や、それを指導する人たちに「多読」を提案し、支援を続けている。http://tadoku.org/

主な監修書：『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんご　よむよむ文庫』レベル 0、1、2、3、それぞれ vol. 1 ～ 3、レベル 4　vol. 1 ～ 2、『日本語教師のための多読授業入門』（ともにアスク出版）

＊ この本を朗読した音声は、NPO 多言語多読のウェブサイトからダウンロードできます。http://tadoku.org/learners/book_ja/mp3downloads

〈にほんご多読ブックス〉vol. 5-3
信長・秀吉・家康 — 戦国時代を生きた三武将
© NPO Tadoku Supporters, 2015　NDC817／35p／21cm

電子書籍版——2015年12月1日

監修者————NPO 多言語多読
発行者————鈴木一行
発行所————株式会社 大修館書店
〒113-8541　東京都文京区湯島2-1-1
電話　03-3868-2651（販売部）　03-3868-2290（編集部）
振替　00190-7-40504
［出版情報］　http://www.taishukan.co.jp

表紙組版———明昌堂
制作所————壮光舎印刷



本書は、2014～2015年に発行された「にほんご多読ブックス」シリーズ（NPO多言語多読　監修・発行）の複製（リプリント）版です。

信長・秀吉・家康

戦国時代を生きた三武将

日本の歴史上、もっとも有名な三武将、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康。日本の戦国時代がわかる一冊。

Nobunaga, Hideyoshi, and Ieyasu

— *Three Shoguns from the Civil War Era*

Nobunaga, Hideyoshi, and Ieyasu: In Japan, even children know them as war loads. What did they do? Learn about the era of samurai.



0	入門	Starter
1	初級前半	Beginner
2	初級後半	Elementary
3	初中級	Pre-Intermediate
4	**中級**	**Intermediate**
5	中上級	Pre-Advanced

vol. 5-3